

プロローグ ロシアの反体制運動とは何か

二〇二二年二月二四日に始まったロシアによるウクライナへの軍事侵攻は、私たちの予想を超えて続き、その間、おもにインターネット上で、戦争に反対する人びと、体制に抗う人びとの姿を毎日のように目にしてきた。

二〇〇〇年からほぼ二〇年以上にわたって続いているプーチン政権^{*1}は、独裁的ともいわれるその強権的な政策によって、世界の多くの国々へ負の印象を与える一方で、国内においては市井の人びとの小さなプロテストをも抑えつけ、「政治囚」は拘置所や収容所、刑務所に絶えることがない。リベラル派野党勢力のリーダーだった人たちは暗殺や獄死に果て、反戦活動家たちは国外へ追われ、国内に残った人たちは逮捕を覚悟でピケを張ったり、匿名での体制批判や出版活動、取り締まりの少ない夜間のビラ貼りなどを続けている。

二〇一〇年ほど、命を危険に晒す^{さら}ことなく自由に意見を表明すること、名前や顔を隠さ

ずに政策に異議を唱えることが極めて難しい社会になりつつあったが、ウクライナでの戦争開始後はさらにこれに拍車がかかった。

しかし、弾圧の強化は、体制に抗う人たちが、ロシアに途絶えることなくいるということの証左でもある。

アレクセイ・ナヴァリヌイ（一九七六—二〇二四）は服毒事件の後、囚とらわれると知りながらも、なぜロシアに帰国したのか、結果としてそれは、まさに命を賭ける選択となってしまった。^{*3}政治家だけではない。数百人もの逮捕者が出る政治デモになぜ若者たちは参加したのか。ウクライナでの戦争が始まると同時に反戦を訴えたフェミニストたちは、逮捕や暴力被害を受け出国を余儀なくされたにもかかわらず、なぜ今なおロシアから目をそらす活動が続いているのか——こうした問いは常に驚きを伴いながら私のうちにある。政治から目をそらすことなく体制と闘い続けるロシアの活動家たちを動かす力はどこから湧いてくるのか、なぜそんなにも挫くけることなく前を向いていられるのかと。

そして何よりも、闘う人びとの中に多くの女性たちがいること、ともすれば女性のほうが多いように見えることにも驚嘆し続けている。

本書は、こうした一連の問いの答えを、まずは歴史の中に探してみようという試みである。一八六〇年代以降活発になったロシア帝政時代の女性運動を起点に、一九世紀から現在に至るまでのソ連時代を含めたロシアにおいて政治権力や体制と闘った女性たちを追ってみると、そこには連綿と続く女性たちの活動の歴史がある。弱者を助け、制度と闘う、時には皇帝との闘いに挑む果敢な女性たちがいつの時代にも存在していたのである。

彼女たちは、時には「テロリスト」とも呼ばれたが、「ナロードニキ（人民主義者）」「革命家」「異論派」「人権活動家」「女性解放運動家」など、時代や体制、活動の仕方によってさまざまな肩書きを与えられてきた。その中には、テロⅡ暴力を活動手段とし、実際に他人の命を奪った者もいる。一方で、みずからの命を犠牲にした者、投獄や処刑などでその命を失った者も少なくない。

一九世紀後半から二〇世紀初頭の革命へ至るロシア史を記述した書物はふんだんにある。そこには、エカテリーナ二世や、革命家の女性たちの名ももちろん見ることができるが、やはり圧倒的に男性の名が多いのも事実だ。女性たちにいかなる権利も、教育や活動の機会も十分に与えられていない以上、社会を変えようなどという意志に目覚めることも難し

かったかもしれない。それにしても、である。

女性たちは歴史記述の際に切り捨てられてきたのではないか——そんな疑問をもったのは私だけではなかった。ロシア本国においても、数年前から若いフェミニストたちや女性史研究者らが、自国の歴史を洗い直し、記述から漏れた女性たちを一人一人拾い上げようとしている。

例えば、二月革命が起きたときに、レーニンら一行が、スイスから「封印列車」でドイツを経由しロシアへ帰国した有名なエピソードがある。このときの様子を描いた絵画はいくつもあるが、言うまでもなく英雄的なレーニンの帰還という図柄になっている。写真では、そばに妻のクループスカヤがいるし、列車には他の女性革命家たちも同乗していたのだが、列車内の光景を描いた絵画には女性は一人も描かれておらず、男性陣が帰国後の戦略を練っていることになっている。こうしたことも誰かに指摘されなければ気づかないまま、私たちの記憶に、「革命＝男性」の仕事という印象を重ねていくことになるのである。

ロシアでは、その歴史を通して、政治と文学の関係が非常に近い。「ロシア詩の太陽」といわれ今なお愛されている詩人アレクサンドル・プーシキン（一七九九—一八三七）も、

彼を敬愛し、その死を嘆いた大詩人ミハイル・レールモントフ（一八一四—一八四二）も帝政批判の詩を書いて、流刑となっている。

ソ連時代の詩人ユリア・ヴォズネSENSカヤ（一九四〇—二〇一五）は、一八歳で詩人として作品を発表しようとする段になったとき、公式の詩人となるか、非公式の詩人となるかを選ばなければならなかったという。公式の詩人になれば出版は可能だが、自由に書くことはできない、自由な非公式の詩人となれば出版はできない——こうした選択が芸術に関わる者たちすべての道に課される。ヴォズネSENSカヤは非公式の詩人となる道を選んだが、その道の先には、逮捕、流刑、国外追放という未来が待ち受けていた。

私自身の専門は文学で、女性作家たちの創作を中心に研究を続けてきたが、その過程で、政治の影響を受けたり、積極的に政治に抵抗したり、あるいは、頑^{かた}なに政治と距離をとろうと努めたりする文学者たちと出会ってきた。好きな作家や詩人を見つけ、本のページを開けば、すぐさま政治の問題とぶつかる、それがロシアという国だった。

そのため本書には作家や詩人たちも数多く登場する。言論の自由、表現の自由は、彼ら／彼女らにとって最重要の権利である。かたや権力者たちも筆の力を知っているからこ

そ、創作者の自由を制限し、逆らう者は排除するという強硬手段を取り続けてきたのである。そして二一世紀の現在、権力に抗う者たちの先頭に立っているのは、「フェミニスト」や「LGBTQ活動家」「反戦活動家」と呼ばれている。もちろん、ソ連時代によく用いられた「反体制派」という肩書きも復活している。

こうした人たちは、みずからの理想とする社会を目指し、あるいは眼前にある暴力的な制度を少しでも改善しようと、身を挺^てして政治に訴える活動を実践している人たちである。ロシアの女性史をたどろうとしてきた私の目には、現在、反戦運動を率いているのが「フェミニスト反戦レジスタンス（FAR）」に代表される女性たちであることは歴史の必然のようにも見える。彼女たちの反戦運動については、二〇二二年以降、日本の多くのマスメディアで紹介する機会を得たが、女性たちが先頭を切ってあのプーチンと闘っていると、いう事実には非常に驚かれた。その際に十分な説明をできずに終わった悔いも本書執筆の動機となっている。

ロシア帝国／ソ連／ロシア連邦の歴史には、常に権力と闘う人たちがいた。だからこそ

ロシア革命は起きたのだし、ソ連当局に弾圧された無数の人びとがいたのだし、長期化しているプーチン政権に抗う人たちが今もいるのである。

実は日本では、冷戦時代に、「反体制派」と呼ばれるソ連の活動家たちについては非常によく研究されていた。その多くは、ソ連当局のイデオロギーと政策が、プロパガンダを手段とした悪^あしきものであることを示すという西側諸国共通の文脈で行われ、マスコミによる報道もその視点に基づいていた。

「良心の囚人」と呼ばれる「政治囚」たちは、腐敗した国家の善の部分として、「悪⁴当⁵局」によって弾圧される犠牲者なのだという明確な二項対立は、アンドレイ・サハロフ（一九二一—一九八九）やアレクサンドル・ソルジェニーツィン（一九一八—二〇〇八）のような世界的な著名人を介して具現化されたが、不自然なほどに女性たちの名が少ないことも確かだ。脇役のように添えられる女性の名、その場にいたはずなのに名指されることのない女性たち。彼女たちは何を見て、何を考えていたのか——本書では、これまでの歴史記述の隙間を埋めるように、みずからの生きた時代に理不尽な政治体制の変革を目指して活動した女性たちに目を向け、その生を記録してみたいと思う。

この試みは、同時に、まさに現在のロシアでもアクチュアルに続いている反体制・反戦運動の思想と気概が、世紀を超えて、かの国の歴史に淵源えんげんをもつものであるということを示すものともなろう。

目次

プロローグ ロシアの反体制運動とは何か

3

第一章 闘う令嬢——ナロードニキの女性たち

15

女性運動の始まり

ナロードニキ運動

「トレポフ狙撃事件」——ヴェーラ・ザスーリチ

「恐ろしい女」と妹たち——フィグネル姉妹

皇帝を暗殺せよ——ソフィア・ペロフスカヤ

「怠惰な社会よ、覚醒せよ！」

第二章 一九一七年の女性たち

49

革命と女性

第三章

革命の受難者——マリア・スピリドノワ

ロシア革命の祖母——エカテリーナ・ブレシコフスカヤ

十月革命の女たち

女性たちを革命に——アレクサンドラ・コロンタイ

労働者に学習と教育を——ナデージュダ・クループスカヤ

反ボリシエヴィキの女性たち ① アリアードナ・ティルコワ

反ボリシエヴィキの女性たち ② 「女性愛国同盟」

反ボリシエヴィキの女性たち ③ マリア・ボチカリョーワ

スターリン時代を生き抜いて

スターリンの大テロルと弾圧

独ソ戦と戦後

ジダーノフ批判

書けずとも記憶で抗う——アンナ・アフマートワ

回想を書く女たち

地下文学の芽生え

地下の非合法出版「サミズダート」

第四章

もうひとつの歴史——反戦・反核・フェミニズム運動——

「雪どけ」を迎えて

「反体制派」の時代

ふたつの文学裁判と記録者たち

反体制派たちの反戦・反核運動

人権運動の組織化

女性人権活動家たち

モスクワ・ヘルシンキ・グループ

メモリアル

地下フェミニズム運動とキリスト教

第五章 プーチン政権と闘う女性たち

プーチンの登場と女性たち

家庭内暴力から女性たちを護れ

プッシー・ライオット

闘う女性ジャーナリストたち ① マリーナ・オフシャンニコワ

闘う女性ジャーナリストたち ② アンナ・ポリトコフスカヤ

闘う女性ジャーナリストたち ③ スヴェトラナ・アレクシエーヴィチ

闘う女性ジャーナリストたち ④ エレーナ・コスチュチェンコ

フェミニストたちの反戦運動

LGBTQ運動

新しい「サミズダート」——オンライン出版

あとがき

註

参考文献一覧